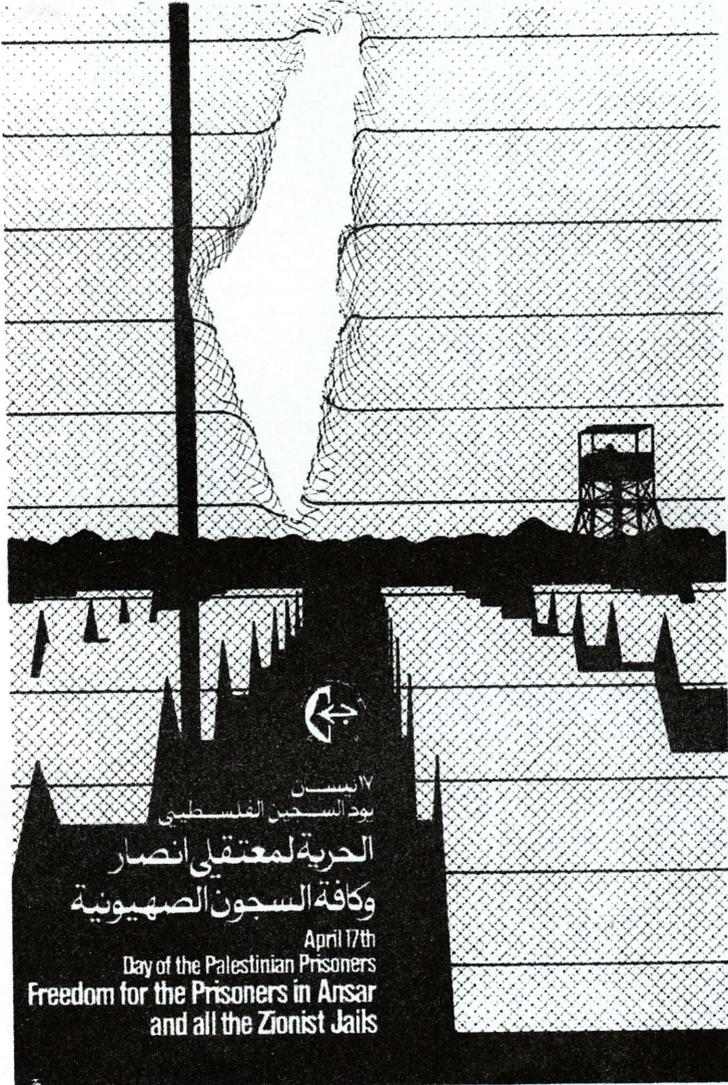


سوی سوی
سوی سوی



١٧ نيسان
يود السجن الفلسطيني
الحرية لمعتقلي انصار
وكافة السجون الصهيونية
April 17th
Day of the Palestinian Prisoners
Freedom for the Prisoners in Ansar
and all the Zionist Jails

سوگ　　سوگ

重信房子さんを支える会（関西） 会報さわさわ2号で

12月11日は、PFLPの40周年です。1967年の第3次中東戦争の敗北の中から、国や、政府に頼るのではなく、自らの人民の力で、人民解放闘争によって、祖国を取り戻そうと、いくつかの反植民地抵抗運動を共通点としていた組織が集まり、作られたのがPFLPです。1967年12月11日に創設されました。ANM（アラブナショナリストムーブメントのリーダーだった、ハバシュ議長がPFLPの議長となりました。そして40年、今、厳しい「和平」攻撃の分断策動の中で、PFLPが、かつてのように、ファタハとハマスの統一のイニシャチブをとってほしいものです。そういういきさつの上に、PFLPのパレスチナ解放人民闘争の歴史を讃え、連帯します。

重信房子

重信房子さんを支える会（関西）

PFLPの創立40周年12月11日

【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。“さわ”一語でその意味がありますが、“さわさわ”と続けて言う言い方もよくされるそうです。音感が良いことから会報タイトルには“さわさわ”をいただくことにしました。

私の京都・大阪物語（2）

重信房子

<7・6事件前夜>

「夜汽車に乗って、関西へと向かいました。23歳の夏です。」で、前回はペンをおいたのですが、「東京物語」だけでなく、「7・6事件」について、やっぱり触れておこうかと思えます。「7・6事件」とは、前回に書いたように、赤軍派フラクの者たちが、明大和泉校舎のバリケードの中にいた当時のブントの仏議長に自己批判を迫り、殴り、負傷させ、介入した権力に、仏議長を逮捕されてしまった事件です。そして、直後、塩見さんらが中大に拉致されたこととあわせ、1969年7月6日に起こった事件を「7・6事件」と呼びます。この「7・6事件」によって、すべてがおかしくなっていました。当時、はからずも私は、渦中にいたためにこの「7・6事件」によって、ルビコン川を渡ったのだと今から振り返り、捉え返して思えます。もし、私が「7・6事件」に居合わせず、人から聞いただけだったら、きっと、ルビコンの川辺を越えなかったでしょう。川を渡ったそのことを後悔しているわけではなく、教訓を深めずにやり過ごしてしまった自分には悔い多しなのです。「東京物語」ではありますが、「京都・大阪物語」と絡んでいるのでやっぱり書いておこうと思えます。

当時、ブントの赤軍派フラクションは御茶ノ水の医科歯科大学の515号教室を拠点にしていました。活動の中心はオルグ合戦だったので。私は関西出身のDさん、藤本敏夫さんと書記局的な活動を始めていました。当時はわかりませんでした。後に、CPA,CPO(人民軍事委員会、人民組織委員会)という形を取っていく人民組織委員会の書記局という形だったと思えます。7月5日の夜に「最大動員で515教室に集まるように」との連絡を受けて、行くと、明大の仲間たちも既に駆けつけていました。当時私は銀座のバーにアルバイトで勤めていて、多忙で夜遅く駆けつけたのですが、既に80人近い人々が密集して、室には入りきれないほどでした。口角泡を飛ばして、熱烈に塩見さんが演説していました。「中央指導部が、



武装闘争を切り開く党の改組を拒否し、逆に正当な闘いを求めている赤軍フラクのこの我々をブントから放逐しようとしている。許せん！自己批判させて、党を革命的に再建すべきだ。」というようなことをアジっていたと思います。「明大校舎に向かってただちに進撃を開始しよう！」すぐに行動に移ろうとしています。仏議長らが、バリケード中の、明大の教養学部のある和泉校舎の中で、会議に集まっているという情報が丁度わかっていたからです。せっかくの高揚気分には水をさすかな…と思いつつ、私は「あの一、もう終電がありませんよ。ただちに進撃といっても、タクシーに分乗していたら、膨大な出費です。朝一番にしたらどうですか？」と言いました。あとでわかるのですが、以降も、熱烈な人々は、お金がいくらかかるなど、まったく考えずに計画を立てるということに驚かされたものです。結局、朝の国電に乗って、御茶ノ水駅を出発することになりました。

<望月さんのこと>

7月6日の朝、再びアジ演説と、あわただしい出発準備の515教室に電話が入りました。受話器を取ると、モチ（同志社の望月さん）の、しゃがれた元気な声。「今、東京駅に着いたから、これから行く。」とのことです。Dさんから「君はモチを待って、和泉校舎に連れて来てくれ。」と言われて私はみんながいなくなった医科歯科大515教室でモチを待っていました。

モチと私が知り合ったのは三里塚闘争の帰り道です。当時、皆貧しい生活ぎりぎりで、一身にすべてを賭けて闘っていましたから、お金はありません。三里塚現地闘争も、デモの隊列を組んで無賃乗車で突破する学生もありました。駅員も見逃してくれたり、時には協力してくれたりというのが、時代の雰囲気がありました。私たち明大の仲間はそのようなことはしないと決めていました。だから切符はいつも持っています。成田現地闘争の帰りのある日です。上野の京成電鉄から国電に乗り換える接続改札に今日は捕まえようという布陣で、駅員が奔っていて、一人ひとりの切符を点検していました。デモの隊列を組んで、突破しようとして何人かが阻止され、切符を見せろとやられてしまいました。丁度、小柄な望月さんが阻止され

そうになって抵抗していました。思わず私は彼の手の中に、改札を通過した私の切符を渡しました。気づいて彼は反撃に出ました。「何が問題だ！え！？見てみろ！この切符のどこに問題があるんだ！」相手を謝らせて悠然と通過しました。ホームで、ありがとうと切符を返してくれました

そんな偶然で、時々、東京に出てくると挨拶を交わしていました。元気の良いこの人がモチという人で、赤軍派の同志社の仲間たちの一人だというのを後に知りました。でも、7月6日の朝、結局、モチはなかなか着きませんでした。後でわかったことなのですが、モチは御茶ノ水駅を降りた後、拉致されて、中大に連れて行かれていたのです。

<7・6事件>

私は遅いなあ…と一人でモチを待っていました。そのうちDさんから電話が入りました。「ちょっと大変なことになった。あり金を持って来てほしい」との話です。モチがまだ着いていないというと、いいから、すぐ金が必要だから持ってきてくれと言うので、明大和泉校舎に急いで出かけました。既に機動隊が出動して、バリケード中の校舎を取り巻いています。騒然として大混乱の状態でした。赤軍フラクの人たちを探し、Dさんに金を渡しました。「今、仏議長を怪我させてしまった…。それで安全に病院に運ぶために、彼らにあり金全部渡したいんだ。」とDさんは言いました。「何で?!何が起こったの?!」「我々が暴力を振るった…。昨夜は高校生部隊に、「足の1本や2本、へし折っても、断固仏議長らの赤軍フラク排除を自己批判させる！」とアジッタだろ。アジッただけというのも無責任だったが、糾弾のなかで、そのまま高校生たちがやってしまった。とめる訳にもいかず、ひきずられるように、ワシらも殴った…。とにかく安全に、仏さんらを逃がさなくちゃ。彼には破防法の逮捕状まで出てるんだから。」とD。「何それ?!そんなの革命じゃない!」私は驚きと、話が違う…という思いで呆然と話を聞きました。それからどうしていいかわからず、みんなと離れて一人とぼとぼと、裏道から校舎を後にしました。

広い原っぱにヤブカンゾウのだいたい色の花が真っ盛りで、遠くまで咲いている道をぬけて歩きました。革命ってこんなこともしないといけない

のか…何かおかしい…。あの時のヤブカンゾウの美しさと、どうしようもない革命というものに対するわけのわからない憤りの情景は今も鮮かです。原っぱをつきつて、車道に出て、タクシーをとめた時、後から、バラバラと走ってきて「先にタクシーを乗せてください！」と声がしました。ふりむくと、一緒につい最近まで活動していた専修大のIさんら数人、仏議長の間人たちです。仏さんを殴った側にいるのだから、私も殴られるかなと一瞬思いました。Iさんが私を見据えて、「こんなの革命じゃないよな…」と泣きそうな顔で言いました。私も同じ気持ちを抱え、何も言えずに黙ってタクシーを見送りました。

それから又、私はタクシーを止めて、出撃拠点の医科歯科へと急ぎました。515教室には、すでに何人かが戻っていましたが、モチは、いませんでした。三々五々、515教室に戻ったところで、今度は私たちがブントの叛旗派という中大を中心としたグループに襲撃されてしまいました。

この襲撃の行動隊長は、中大の全中闘の、T君で、彼も又、つい最近まで親しい仲間の一人でした。67年68年69年と、神田、お茶ノ水の大学仲間は、「ブント」という絆で、助け合いました。明治、中央、専修、医科歯科は、いつも、行ったり来たりしていました。そんな仲間が、消火器と、棒で、医学の教室に乱入し、Tくんは先頭で突入してきました。「何だ！重信、お前も居るのか？ナンセンスだな！」といいながら、みな廊下に連れだすのですが、お前だけ残れ！と、私を助けようと防衛してくれました。そうされると格好悪いと思い、いきどおりもいっぱい、ふりきって、「拉致される中に、入れろ」と騒ぎました。結局乱闘で、頭を割られた人たちの治療をしると、T君は言うし、塩見さんや田宮さんらに確認し、私は、拉致から排除されて、取り残されました。さっそく、下の階の治療室に、5、6人の負傷者を運びこんで、すぐ、消火器で泡だらけ、水びたしの515教室に戻りました。さっきまで応戦でバリケードに使っていたロッカーの中から、ハンドマイクや、鉄筆や、持てるだけものを持って、泡だらけ、水びたしの黄色のシャツを、格好だけ整えて、残りの人々との合流をめざしました。



湯島のあたりをうろうろと歩きました。そして、下級生や、Tさん、Dさんたちと合流しました。あれだけ大乱闘で破壊した医科歯科には、道義的にも居られなくなりました。私は、即、目と鼻の先の、明大の学館に行こうと言いました。明大の学館を拠点に、ML派の友人や、私が理事をしていた明大の生協の仲間の協力を得て、ピラまき、政治交渉で、断固反撃に出て、塩見さんらを奪還しなければと思い又、主張しました。私にとっては、なじみのお茶の水一帯です。

明治の学館から100mくらい先に中大があり、又、すぐそばにブントの戦旗社もあります。反撃にはもってこいだと思ったのです。結局、東京には馴染みが薄く、神奈川を拠点に活動してきた、残ったリーダーたちの意向もあったのか、結論としては、関東学院へと退去することになりました。仏議長らに暴力を振るった時には私は、反省も込めて、革命について考えさせられながら、515教室に戻りました。そこで襲撃を受けたことで、また、抜き差しならない当事者となりました。仲間を取り戻さなくてはと感情的になっていきました。専修のIさんも、中大のT君も、友情の中で闘っていた仲間たちと、もう一緒にやれないのか、闘っていけば、又会える時があるに違いない、闘い続けること、今、この道を進む以外ないのだなど…私は「7・6」事件の経験によって、一知半解のまま、戦いの決意をさらに固めました。私にとって、「7・6事件」は今から思うと、人生の分かれ道だったに違いありません。それも、時代の激情に駆られたように「闘う」という「使命感」にすべてを自己肯定して進んだのだと思います

<関西へ>

「7・6事件」直後、新聞によって仏議長が逮捕されたという事実を突きつけられました。残された指導的人々は、下部の私たちよりもショックだったと思います。結局、拠点にしていた関東学院大学のバリケードを出て、関西に撤退することになりました。赤軍派フラクで一緒だった藤本さんは、丁度、関西から戻ったところで、「7・6事件」に遭遇し、仏派のNさんと偶然に合い、酒を飲みながら、泣き明かした後、戦線離脱を決めた



と、後に本人から聞きました。当時の活動の中で、私の親しかったブントの友人たちは獄中や赤軍派とは遠いところにおいて、赤軍派というのは、明治の一部の仲間と、私を誘ったTさん、それに藤本さんは消え、上司だったDさんや、同志社のKさんと、ごく限られた人しか知り合いはいませんでした。とにかく関西へと撤退することになったので、夜汽車で関西へと向かいました。当時、勤めていた銀座のバーのママに、しばらく関西に行くので、バーをやめるからと言ったので、奮発してもらったアルバイト代で、みんなの切符を買って、夜行列車で大阪へと向かいました。

東京生まれで、東京育ちの私には、夜汽車に乗って旅立つことは、何か新しい出発のように、悲壮感より冒険心でした。寝台車はもったいないと、夜汽車のコンパートメントに座って行きました。「仏さんには悪いことをしたなあ…」ごとごとと夜汽車が走る中、リーダーたちはため息の多い旅のようです。Tさんが「右足は叛旗に、左足は中央派に折られるか…痛いだろうなあ…」とか、「おい！新開さんやっちゃおうか！？うーん、でもなあ、『新開さん』と『さん』付けにしているうちは殴れないなあ…」などと話していました。「大阪に行つてどうなるの？」と聞いても、関西で立て直して、秋の蜂起を準備するのだと言うのですが、具体的な話はありません。「都落ちだしなあ…」とTさん。そんな風な中でも、関西に行けば何とかなるという、みな根拠のない思いがあったように思います。

<大阪で>

私にとっては、初めての大阪に着きました。飛び交う言葉のやりとりの「乱暴さ」に、まず戸惑いました。大阪弁に慣れていないために、言葉が乱暴に聞こえ、まず、カルチャーショックのように異質なものを感じたためです。東京地方人から見ると、節度なく介入してくるような言葉つきです。江戸っ子はどちらかと言うと、慮ってる言い回しを美德とするところがありましたので当初は馴染めませんでした。でも、だんだん何だか本音で語ってる気分になれるな…と好きになりました。そうなる大阪弁を使ってみたくなるものです。ことに「あなたは～」と言う時、「自分～」と言うのがいいと思うようになりました。あなたと私は不可分のように聞こ

えて。次のカルチャーショックはお風呂屋さんでした。東京では湯船が正面隅にあり、両壁側に蛇口が並んでいます。そこから湯と水が出るようになっていて、蛇口を一つ占領して人々に背を向けて体を洗います。おしゃべりと言っても、隣の蛇口に友人と場所を取ったりして、背中を流しっこすることはありますが、あまり大声でおしゃべりはしません。私が入った大阪の銭湯はまずやかましいのに驚きました。湯船が端っこではなく、真ん中辺にあつて、それをぐるりと囲んでそこから湯を汲んで洗ったりするのです。蛇口からの湯は上がり湯だけでよいと思うのか、湯船の周りで話をして、大笑いしたりして、あけっぴろげに背中ではなく身体全体をさらして、話しています。何だか恥ずかしく、圧倒される雰囲気でした。うーん、あけっぴろげ、本音、恥意識の違い、そんなものを大阪に来て感じました。そんなことを驚きつつ学習したのは、大阪に着いた始めの頃です。

まず大阪駅から地下鉄に乗って私たちが着いたのは、桃山学院大学でした。当時、数十人が東京から撤退してきたはずですが、関西出身者が多く、東京から私のように初めて大阪に来た人たちはきっと、20人くらいだったのだらうと思います。地下鉄出口を出るとすぐそこに桃山学院大学がありました。当時P大（ピン）と呼ばれていました。正門やその横の通用門から入ったところに立て看が林立していました。夏休み中だったのか、ストライキ中だったのか、自治会が自由に大学を管理しているようでした。P大の自治会の人たちは、赤軍派のシンパかフラクのものたちらしく、東京から押しかけてきた撤退組に部屋を提供してくれて、そこで当面、待機することになりました。正門入つてすぐ右手に和風の一軒家があり、そこも使っていました。

このP大で驚いたのは「学生諸君に話し合いを訴える」というような、教授会の立看です。私たちは学費闘争などで、理事会や教授会に団交など要求していましたが、どうもP大では、教授会の方が学生に共闘要求をしているようです。このP大では、山田宗陸とか小田実もいたのか、進歩派が多く、「学生と共闘したがってこまるんだよ。」やり込められないように

学生が避けてるんだと言うので、いい大学じゃないかと思ったものです。「論争にも負けるからなあ…」と笑っています。本当かな?!私もカンパ集めがてら、大学の研究室に、P大の学生と一緒にいったことがありました。丁度、アメリカのパークレイの大学が高校から戻ってきたというY先生のところに行って、ベトナム反戦の燃えるような広がり、ヒッピーの様子など、話を聞きました。この先生は、若者のようにジーンズをはいて生徒と友達のように討論しています。「格好若々しいですね!」と言ったら、「この大学に通い始めた時、ヒッピーか乞食と間違えられて、守衛から追い出されそうになったんだよ」と笑って言いました。東京でも大学のバリケードの中で、自主管理プログラムで、教授を呼んで話をしたり、明大でも橋川文三とか、田口富久治とか、気軽に来てくれましたが、この大学の、先生方と学生との近さには驚かされました

<フラクの改組>

数日たって、(今では何日くらい経っていたのか思い出せませんが)P大の一教室に集まるように指示されました。そこには100人弱くらいいたでしょうか、今後の方針を決定するための「総決起集会」を行うとのことでした。この当時はまだ、赤軍派として旗揚げしているわけではありません。会議が始まると、唐突に、指導を担ってきた一人一人が立って決意表明を述べたのですが、内容に驚かされました。決意表明は辞任表明だったからです。

『7・6事件』で仏議長を敵権力に逮捕された責任をとって、ただちに自己批判し、辞任する。又、フラクの指導部の塩見以下も、反対勢力に捕らわれてしまったことも、我々の責任だ。身を退いて、一兵士となって、死に物狂いで、部隊を形成し、秋の蜂起に再結集する。」と、各自口々に、自己の戦線離脱処分の自己批判と、秋の再結集を誓うというではありませんか。当時、まだ、赤軍派はブント内のフラクションで、その中でリーダーシップをとっていたのは、塩見さん以下、後の、7人P・B(7人の政治局員)といわれるメンバーでしたが、そのうち、中大に拉致されている2人を除いて、Tさん、Dさんら4人が「自己批判、辞任の決意表明」をしまし

た。そして、7人のうちのただ1人、YさんがサブのWさんと、全体のリーダーとして、赤軍フラクを継承して、新体制で進めると演説しました。東京から参加した私には、まったく事情のみこめず、唐突で、無責任に聞こえました。藤本さんは退き、知り合いであるTさんらが退いたら、同志社の友人Kさんらしかいません。第一、Tさんらの苦勞に同情して結集してきたような者たちです。ことに藤本さんらが消えてから、Dさんの指揮下にあった私には、塩見さんらの奪還も終えていないのに辞めるのは、責任放棄に思えました。もし4人が辞めるなら、私たちも辞めよう、東京からきた何人かと、同志社の、Oさん、Kさんらで、話をしていました。関西には、何か展望があるのかと、いわば、一切を捨てて、P大にたどりついたら、この有様で、展望も見えないままでした。Dさんを掴まえて、辞めるならオレも辞めると、Oさんたちは引き止めています。自己批判した4人のリーダーは去ってしまいました。「とにかく東京に帰るしかない。東京の仲間たちと今後どうするか検討しよう。」と私は思いました。P大のそばの、屋台のような店で、あーだ、こうだと友人たちと話しをしました。そのうち、「4人のリーダーは、『本隊と顔を合わせることなく、一兵士として部隊を連れて、秋に再結集する』と決意表明したけれど、消耗して、熊野寮で、Tが酒飲んでいた。」などと、情報が入りました。「DやTが辞めた赤軍なんて、気の抜けたコーラだよ。オッさんらを説得しようぜ。」とKが言い、私も東京に戻る前に、彼らと話をしたいと、京都に向かいました。そして必ず一緒にやろうと約束させようと思いました。彼ら4人に見れば、自分たちが居れば、新しい体制を決めてもそれにみんなが結集しないだろう。自分たちが消えることで、新体制を作ろうとしているに違いないと、私たちは話をしていました。そうでなかったら熊野寮で消耗しているはずはないのだからと。「7・6事件」で誤りを導いた。けれども起こった現実はどう責任を取っていくのか?まず拉致されている仲間を助け出してから考えよう。そのためには、4人と再会しなければならぬ…。京都へ。蟬しぐれの激しい御所を抜けて、同志社へと向かいました。

<同志社のバリケードの中で>

同志社の学館を拠点にして何日か過ごしました。悲壮な時代だったはずなのに、当時の私の傾向を反映しているのでしょうか、Dさんらに会って一緒にやる気であることを確認したら、何だかそれでホッとしてしまいました。Kさんの紹介で関西の新しい友人たちと出会いました。何人もの京都の女子学生たちにも出会い、反対に東京で活動したいと相談されました。蝉しぐれの早朝の御所や、同志社の学館の対面の何とかという寺を散歩し驚くほど暑い夏の京都に数日過ごしていました。当時、同志社大学は全学バリケードスト中だったと思います。

そんな時、同志社出身の仲間が「バリケードの中を探索に行こう！宝物があるかもしれない」と言うので、何人かにくっついて、バリケードの中に入り込みました。「宝物」とは、要は、大学の資産を失敬するということです。本当にそう考えていた人はいなかったと思いますが、いたずら心からそんなことになりました。明治大のバリケードの時には、自治会執行部であった私たちがロックして教授の部屋や、研究室に入ることはできませんでした。それなのに、いい気になって、私は探検気分で、誘いに乗って、夜の同志社のバリケードの中に無責任に入りました。神学部か、学長室に大きな埴輪の置物がありました。「うわー！、これは？！」と言うと、「アホ、そんなもん、すぐ足つくやないか」、うーん、なるほど…。屋台のひやかしのよな気分で、私を入れて5人、冗談を言いながらあちこちの部屋を覗いていました。「誰だ！」と、バタバタと音がして、ヘルメットに棒を持った学生の一団に囲まれました。「お前らそこでなにをしている！」と、大声で呼び止められました。大変だ、とんでもないことになった！自分たちが盗賊になってしまったようで、私は真っ青になりました。正義はどこへ行ってしまったのか？！何ということだろう…。沈黙の一時の後、「あ、Sさんでしたか、久しぶりです！」と、棒を持っていた学生のリーダーが、こちらの探検隊の一人のSさんを認めて、懐かしそうに声をかけました。Sさんは相手を一瞥し、「オウ」と言うだけで、拵げていた本を読み続けていました。学生のリーダーが「行くぞ！」と他の学生を促し、「じゃ、又！」と言って、去って行きました。私は、「もうどうなるかとおもった！すごい

ね、Sさん、全然動じないんだ…。」と言うと、Sさんは「いや、俺もバツが悪くて、恥ずかしくて、顔をあげることができなかつたんだ。」と言いました。「絶対、悪いことはできないな。よかつたな、悪いことをする前で。」一人が言いました。本当に。たとえいたずら心でも、針一本盗むなんて、これから生まれる革命になんという汚点となったかもしれないことを…。この事件は、モラルにしっかり立った闘いと、心に刻むこととなりました。翌日、私は東京へとまた、夜汽車で向かいました。

<赤軍派結成へ>

東京に戻ってすぐ残ったフタクの仲間と、中大の塩見さんらの政治的解放や、力づくの奪還を話し合いました。ある日、千葉のアジトのTELが鳴りました。中大で拉致されていた塩見、花園、望月、物江4名が中大から脱走しました。計画より数日前でした。即、履物を持って、仲間が、向かいました。モチが脱走時、負傷したので病院の前に届けて付き添いを頼んだこと、これから即動けるように車を手配してくれというものでした。私は丁度、居合わせた明治の下級生のJに、何とか行ってくれと頼みました。「ぼくはペーパードライバーだけど…」と言いながら、出かけました。後で聞くと、そのまま関西まで走ってくれと、夜通し走り続けたとのことでした。あの運転で運転ができるようになったと、後に言っていました。

塩見さん以下が関西に戻り、責任を取って辞めていた4人を呼び戻し、それまで、まだ、ブント内問題として自己批判しつつ、交渉して、ブントに戻ろうとしていた方針を転換して「別党コース」を決めたようです。ブント中央が、仏議長の件で塩見さんらを除名するという結果だったようです。その後、8月下旬、城ヶ島のユースホステルで、赤軍派結成の集會を持って、別党コースを歩き始めました。100人に満たない人々が、全国から、城ヶ島に集まりました。徹夜で議案作成をした7人のリーダーは、一人が喋っている間は、他の6人は、鼾をかいて寝ているというありさまでしたが、とにかくスタートしました。我々こそが世界を変えることができる。これまで「全世界を獲得するために」という本を片手に持っていた関西の人々は、「現代革命ⅠⅡⅢ」を結成の書として確認しました。後にパン

フNo.4として、同時代の人々に影響を与えていった書です。ロシア革命以降、世界はプロレタリアートの力がブルジョアジーを逆制約する時代に入っているのです。情勢や条件を待って、受動的に革命を捉えるのではなく、自らが革命情勢を作り、切り開くことによって、世界革命まで実現し得る時代である。そのために主体形成として、党・軍戦線を作りあげて行くことが最重要であり、そのさきがけとして、秋には、自ら捨石になっても、前段階蜂起で、首都機能を破壊し、新しい革命情勢を切り開くというものです。戦前、民族運動に関わっていた父から、それ（前段階蜂起）は、プロレタリアートの革命ではなく、赤色クーデターではないか、と言われたことを覚えています。7・6以降ごたごたしたために「秋の蜂起」の準備が遅れてしまった。とにかく闘いたい。この一念が、別党コースへ突き進む力になっていました。こうして9月4日政治集会による赤軍派の初登場になるのですが、その後、9月22日、モチが死亡しました。脱走する時の怪我がもとで、意識を回復せずになりました。7月6日朝、「今、東京駅に着いたからこれから行く」と、しゃがれた元気な声で、電話口で語っていたモチ。結局、新しい闘いを、最も積極的に望んでいた仲間の一人の命を失いました。「戦死だなあ、これから何人が死に、何人が生き残るのだろう。」モチと仲良しのKさんは泣いていました。武装闘争を求める赤軍派の登場は、当時の学生運動の高揚の、必然の中にもありました。黒ヘルもブントも中核派も、時代の波の中で、武装闘争へといずれ進んだでしょう。けれども「7・6事件」は、赤軍派フラクのリーダーの、小さな権力争いによって引き起こされた、誤った出発をなしてしまいました。以降の、赤軍派の、人民性、社会性の欠けた、軍事一点張りの闘い方、軍事を自己目的とした闘い方は、「7・6事件」の負債から出発したことに制約されていたと思います。それでも闘いたい！9月4日、政治集会で、赤軍派の結成を宣言しました。その公然とした出発後、多くの若者たちが共感し、後に続き、そして結集してきました。

ルビコンの川を渡りし日を思う

我が終章のいまだ終らず



思想として語られるのか、全共闘

……小阪修平追悼に替えて

千田 智之

歴史と記憶などと大上段に振りかぶる気はないのだが、何事につけても過ぎ去ったことを語ったり、書こうとすれば、これは憑きまとう言葉だ。第三者の言説が「歴史」で、当事者が語るのは「記憶」（経験の不完全な保存）だという単純な腑分けの問題ではない。歴史と記憶のはざまが最も難しく、言表可能性の限界（記憶や情念を適切に言葉にはし得ないという思いのもどかしさ）を感じる。

今年（2007年）8月10日に亡くなったと報じられた、同時代人小阪修平の『思想としての全共闘世代』（ちくま新書）の読後感が催したのは、まさに「歴史と記憶」なのだった。彼はその新書のあとがきに、「全共闘運動の時代は、もう歴史に属している」と明記したが、この場合は単に遠い過去となったという感慨の方が勝っているのだろう。しかし、比喩的ではなく、「全共闘」はもうそろそろ「歴史」として本当に議論されてしかるべきだろう。

哀しくても、偶々の他愛のない符合故か誰も指摘していないので、一言最初に触れておきたいのは、この新書の「奥付」の日付だ。第一刷発行の日付は、奇しくも著者たる小阪が亡くなるちょうど1年前の2006年8月10日となっている。新書の奥付は好い加減なもので、これが書店の棚に並んだのはほぼ2週間ほど前のことだったと思われる。私のメモでは、同年8月2日に本書を読了した。いずれにしても、本書の「あとがき」の日付が同年7月となっているので、これが小阪修平（1947年生）の遺著ということになるのだろう。哀悼の意を捧げたい。何せ彼は私と同年なのだから。

しかし多分、この書名は編集者の作（策？）なのではないか。個人的な



付き合いは全くないが、随分正直な人のようだから、わざわざ「(編集者から) 思想として団塊の世代をとらえるものを書いてみないか」と誘われたと「あとがき」に書き、「はじめに」では『思想としての全共闘世代』について語ろうとすれば、あの時代を通過したことが、それ以降の生にとってどういう意味をもっていたのかという角度からしか語るができない。いいかえれば経験という位相で語るしかない」と述べている。

にもかかわらず、思想として、しかも全共闘を世代で括って語ろうとしたのは何故か。どういう立場か状況かは別として、何らかの係わりがあれば「もう一度70年以降の三十五年をふりかえってみるべき時かもしれない。全共闘とはなんであり、一体何が実現し実現しなかったのか、また、いまのぼくたちにとってその時代をくぐったことの意味は何か」(同書、第九章)という問いかけが出て来るのは理解できるだろう。われわれは常に意味に捕らわれており、しかも、自らが現に存在し、或いはかつて存在した構造・文脈・状況の全体を分かちおきたいと思うからなのだ。「記憶」ではなく、「歴史」を求めるのは、そういうことなのだろう。しかし、著者の小阪自身が、15年程前の同じ試みが挫折したことを本書の「あとがき」で吐露している。その20年後に出来なかったことが、更に15年経った35年後には可能となるのであろうか。

小阪が関わったのは「東大全共闘」の運動であり、それとの関わりが、本人が言うように「斜め」であったり「片身」であっても、或いはフロントのシンパだったり東Cベ平連(東Cとは、東大教養学部のこと)やクラス協議会の活動家だったとしても、本書で語られるべき経験の位相とは、事後的な印象であり感想に過ぎない。はっきり言えば「証言」ですらない。もち論、それを誰が責められようか。しかも、彼は「じつはぼくは六〇年代後半から七〇年代初めにかけての記憶がかなり断片的なのだが、それに加えてこの時期、生活に関連したことにほとんど関心がなかったからだと思う」(同書、第1章)と、これまた正直に述べている。異議なしと声高に言っても詮ないことはではあるが、全く同感である。

「思想」という言葉が包括的であると言うことは実に曖昧で都合の良い

言葉なのだ。主義やイデオロギーの意味もあるが、社会思想或いは現代思想など、どのような使い方もコンテクスト次第であろう。しかし、個人の意識や生活の領域に限って言えば、それは多分「思考の一貫性」や「信条・信念への執着」を意味する。

なる程、小阪修平は結局彼なりの「全共闘体験」に拘っていることは本書から伺われる。既に指摘したことだが、彼はその点でも正直な人だ。だから、この著書で60年安保闘争やその後の三派全学連、或いは70年代の様々な動きが語られても、著者がそうであるように、読者としても他人事だ。そこには彼自身も登場しない。「思想としての全共闘世代」などは語り得るものではないから、思想としての、「東大全共闘だった小阪修平」が語られているとしか思われぬ。

世俗的には小阪修平とは、東大を中退(66年入学)して予備校講師、評論家、在野の哲学者ということになる。つまり、知識人だ。著書も多い。著述家としては優秀だ。しかし、記憶が曖昧で断片的であると認めつつ、自らを過去のその時代から抉摘するのは、彼にとっても難しい。「記憶とは忘れたくても容易に忘れられないものとして心に執りつく一方で、忘却したくないと願うことはたやすく色褪せてしまうものである。この自分のうちにおけるつかみがたさ、捕まえようとして逃げ出してしまふ記憶」(磯前順一『喪失とノスタルジア』みすず書房刊)を扱うには、小説(フィクション)でなければ、「思想」とする他はない。

しかも、ある歴史学者は「戦争体験」について、「どのような私的な過去なら人前に出せるかは、社会的に決められる。時代とともに風潮が変わると、それにつれて人前に出せることも変わってくる。いま、なにが期待されるかに気を配りながら、人々は自分の過去を『思い出す』のだ」(キャロル・ブラック『歴史で考える』岩波書店刊)と指摘している。ここで言われる「人々」とは、知識人ではない。兵隊で言えば一兵卒だ。だから、時代が変わって、私はブントの姫岡玲治でしたと平然と日本経済新聞本紙に「私の履歴書」を書く青木昌彦は入らない。

小阪修平の困難は、60年代に普通の「人」が東大闘争や東大全共闘に「遭

遇」して、色々あって、「思想家」に成ったことだと思う。このメタモルファーズについての自己言及には彼は失敗していると思えない。「団塊の世代」と「全共闘世代」は社会統計的にはともかく、各個人の過去という領域においては、さらに言えば「思想」としても等号で結ばれるものではない。60年代末に、全国で100以上の大学でバリケード封鎖やストライキが行われ、10万人を多分超えるオーダーの、何とか大学全共闘学生が居たとしても、その数や同世代における構成比の多寡で評価しても仕方ないだろう。

とは言え、いずれのことにも例外はある。40年近くも付き合っている、私の畏友Kが激賞した島泰三の『安田講堂 1968-1969』（中公新書、2005年11月25日発行）には驚いた。メッセージ性は何も無いが、その強靱な記憶やその復元の努力と、明確に「歴史」を刻もうとする強固な決意と自己言及には、彼の、東大全共闘としての凄まじい体験（安田講堂籠城組の本郷学生隊長で、統一公判に加わり懲役2年）と相俟って、読者の共感は一般的には相殺されるであろうレベルである。それ程までに島の「証言」は壮絶だ。

これ程の強靱さを、たとえ書物としても目の当たりにすると、同時代人であり、何処かの「全共闘」だったとしても、私は却って辟易する。その隔絶感はノスタルジアすら打ち消すのである。その点、小阪修平の曖昧な記憶という自認は、「われわれの内部に脈打つ記述不可能な時間の流れ」として何となくノスタルジアとも呼ぶべき感情を引き起こしてくれる。つまり、「ノスタルジアとはいまだ知らぬ相手のなかに見いだす親しみの予感であり、見知らぬもの同士を惹きあわせる直感でもある」（磯前順一）からだ。

もち論、島泰三の経験とその対象化を成し遂げた著書の功績をこのことによって否定するものでは決して無い。彼も実に正直に心情を吐露しており、自らの経験を世代や全共闘に普遍化しようなどということはない。特に、36年もの沈黙を破って同書を上梓した理由を読むと、弱くなった涙腺が強く刺激される。

ここで取り上げた2冊の新書は、実に対照的な来歴を持っている。同じ、

東大全共闘ですらこうなのだから、是非読んで頂きたいものである。但し、この2冊の記述で物足りないことは幾つかあるのだが、それは無い物強請りかも知れないので詳しくは触れないことにする。

ところで、「どの国にも国民の心をときめかせる叛乱の神話的光景がある」（臼井隆一郎）らしい。それは、日本では、赤穂浪士と2・26の叛乱兵士だという。「国民」とは誰かなどという疑問はともかくとして、多分雪景色の連想なのだろうが、この指摘は「日本には、赤穂浪士ともう一つ、白く雪化粧した首都中枢を制圧した叛乱兵士の立ち並ぶ光景がある。日本近代史においてただ一度だけ、革命の可能性が、低く垂れ籠める雪雲のように地上に近づいた例外的状況である」（渡辺京二著『北一輝』ちくま学芸文庫版「解説」）と続く。これは何とも浪漫文学的記述なのだ。しかし、「国民の心をときめかせる」ことはなくても、私の心を締め付ける「叛乱の神話的光景」は間違いなくある。それは言うまでもなく、69年1月の東大安田講堂の闘争だ。機動隊の放水と催涙ガスに煙る安田岩の、有名な屋上の写真は感動と称賛を呼び起こすのか、それとも悪夢か。

だが、国民とまでは行かなくとも、少なくとも何らかの形で大学闘争にかかわった者達が、心に残すべきシーンは、島泰三によれば安田講堂の攻防ではない。それは、68年1月22日に東大安田講堂前で開かれた「東大=日大闘争勝利全国学生総決起大会」である。この情景を記述する島の文章は感動的なものだ。しかし、その時点で「安田講堂のなかに日大全共闘の正規の部屋をおき、合同闘争本部を設置するべきだったのではないか。すでに、政府側は一体化しているというのに、青年たちはどうしても大学や党派の枠から抜け出すことができなかった」（島、前掲書）という感懐とも反省ともつかぬ文章は後知恵に他ならない。幾つかの悪夢を経たが故に絞り出される記述なのである。

過去を「生きる者の頭にとりついた悪夢」（カール・マルクス）として咎めるにしても、それを薄れ行く記憶から歴史に昇華させるべきだろう。それとも、取るに足りぬことは歴史として語られることもないから、当事者達自らが何年掛かろうとも語り出すしかないのだろうか。

当然ながら、叛逆も叛乱も、支配体制としての正統な歴史への否定或いは抗議から生じたものに他ならない。そこで歴史は意識されていても、自らを歴史的に保存することが、叛逆の当時に可能な訳がなかろう。その記憶を歴史へと焼き付け直すにはどうすれば良いのだろうか。個々の当事者が「強い抑圧」(島、前掲書)を撥ねつけて、沈黙を破ることがとても必要であることは疑えないが、それだけでは多分十分ではないのだ。もち論、山本義隆元東大全共闘議長たちが、85年頃から7、8年にも及ぶ歳月を掛けて東大闘争当時の資料数千点を取りまとめて、A4判23巻の『東大闘争資料集』(1992年刊)として製本し、国立国会図書館におさめたのは、称賛に値する「歴史的な作業」ではある。何よりも、島泰三自身が国会図書館に通い、この『資料集』を紐解いて著述の参考にしたと言う。それよりも彼自身が個人として、「沈黙の37年間」に渡って、段ボール箱7つに及ぶ、当時の生の資料を「あちこちに移し、隠して保存しつづけていた」(島、前掲書「おわりに」)という。流石に東大全共闘と言うべきか。島にしても、山本たちにしても個人的領域を越えた思想としての態度と言うことができるだろう。

「全共闘運動は、たとえ政治的な行為であってもその背景には『どう生きるか』という問いがあった。……その意味でぼくはいま全共闘運動を『生をめぐる観念の闘争』だったというふうに定義している。『観念』をつけたのは、問いは日常的な生のありようには届いていなかったと思えるからだ」(小阪、前掲書)と小阪は書き残している。そうかな。島泰三や山本義隆の執念は、君の言う「生のありように届いていない」観念なのかな。この思考と記憶の一貫性と、かつての信念や信条の正当性への執着は、まさしく思想に他ならないだろう。だからと言って「思想としての全共闘」が生きているとは言えない。その運動は、島泰三や小阪の、或いは私の人生をそれぞれに変えたことは間違いない。だが、勝利には届かなかったのだ。歴史として位置づける為にはもう少し語り続けなくてはならないのだろう。もう少し、つまり、生きている限り。だが、小阪修平君はもう語ることができない。私は祈りも弔いもしない。

『10.21 共同反戦行動 in 京都』報告と総括にかえて

都大路に響いた反戦のシュプレヒコール

はじめに

去る10月21日(日)、午後1時を期して円山野外音楽堂で開かれた集会は、晴天にも恵まれて多方面からの結集により、ここ京都の地では久方ぶりの成功した政治集会となった。主催者発表で1,200名という数字は、かつて69年～72年の全共闘運動華やかなりし頃とは比ぶべくもないが、それでもここ数十年の空白を埋めるには十分な動員数であったろう。

特筆すべき事は、これらの参加者が昔のように党派ベースや組合を中心とした動員ではなく、等しく個人による自由意志で参集したということである。

開会の挨拶に立った仲尾宏共同代表(京都造形芸術大客員教授)は、「まさしく50年ぶりに同じ壇上に立って、再びこの場で反戦平和の声をあげることは、私としても感無量です。」と言ひ、いかにこの数十年が彼にとっても厳しいものであったかを振り返っているようであった。同時に同じく田川晴信共同代表の「このまま、自分も何もかもが朽ち果てて行くようだったら死んでも死にきれない」という切実なモチーフは、この集会とデモへの性格づけに大きな影響を及ぼしたが、実のところ、ほぼ一年以上を手探りの状態でやってきたのが現実であった。彼が夢想した各大学の隊列はもう無かったから……

日本の新左翼運動が、そのダイナミズムを継承できずに、主要な隊列を失うばかりか、政治的な登場すら不可能になった90年代から今世紀初頭までの時代を、歴史的にどう総括していくのかは今後とも大きな問題

である。

この冬の時代を、我々にとっての『大空位時代』となぞらえて、ありうべき王も民衆も誰ひとりとして政治的主体の変革を目指せなかった時代とする問題意識が必要であろう。結局あのとき、私たちには何かが足りなかったのだ……

さて、集会は友部正人の優しいが凜とした歌声から始まった。

友部はニューヨークにも拠点を置いて音楽活動を継続している。彼の問題意識は、「Speak Japanese, American」という歌詞の中で、「日本に来たら日本語をしゃべれよ、アメリカ人」という呼びかけと、「日本人よ、きちんと日本語をしゃべれよ」という対比の中で痛烈な風刺となって聴き入るひとたちの心に沁みた。「遠来」で歌われた内容は、もっと深刻なものであった。

♪ 君が台湾にいるのと同じように ぼくは東京にいる
君は台湾に行ってアジアが見えたかい
ぼくは東京にいてこの街もわからない

続いて、今年5度目の上洛を果たした PANTA～響の登場となり、場内は一瞬の緊張に包まれた。重信房子救援のためにと始まった「オリーブの樹の下で」ツアーの最終ステージだと PANTA が自ら MC をすると、万雷の拍手が巻き起こった。とりわけ、頭脳警察結成以来の盟友 Toshi を交えた「7月のムスターファ」は、初めて聴く大半の京都の観衆に大きな感銘を与えたようだった。

イラク戦争には、もうひとつの現実があったという問題提起は、不意打ちを食らったように集会参加者全員の胸を打った。14歳のムスターファを PANTA は

♪ 彼も母の子 誰も母の子



とシンプルに形容して、あの戦争の意味と無意味をあらためて世に問うのだった。

雨宮処凛は、今ももっとも先鋭なプレカリアート論者として登壇し、かつては広汎な運動の主体であった若者が、今は何故に革命の主体たり得ず、貧困と格差に喘いでいるのかを鋭く抉った。彼女には独自に展開する社会批判の糸口を引き続き深化させていって欲しいものだ。

岡真理は、折しも当日京大西部講堂で催されていた演劇集団「パレスチナ・キャラバン」公演に寄せて、およそアカデミズムの世界に生きる人間としては、きっと限界を超えたアジテーションをしたのだと失礼ながらに思う。登壇前のメモを繰り返し目を落としてチェックする彼女の緊張は、私たちにも伝わってきた。でも、あえてリッダ闘争は単なる暴力の問題ではないのだと、いつか彼女と話してみたい、みんな京都の学生だったのだから……

集会在終わりに近づき、各方面からの戦線報告が一巡した後で、ふと少し日の暮れた東山山麓には、まるで私たちだけが異空間に居るような幻想に襲われた。

反戦も反帝国主義も、差別も格差も、グローバリズムもシングル・イシューも、こんなことをたった今考えているのは、一体この国で何人居るのだろうかと一瞬思ったのだが、最後の趙博が音頭を取ったインター斉唱で、その思いは吹き飛んだ。表現を複雑にする思想は、かつての京都も今も余り意味を成さないのだ。まずは、大きな流れを想像して作る、些少な違いにこだわらない。

他人の出自は尊重するが、別の生き方もあるだろうと提起する、そのうえで皆が納得できる運動の地平を模索する……そんなやり方でかつてはやって来た。



それが、権力との間合いを図りながら、ある一定の距離をもって歴史的に登場できた京都の運動のスタンスではなかったのかと思っている。この日、結集した 1,200 名のひとたちは、きつとこういうことを判っているのかもしれない。私たちは一年以上をかけて、この集会を企画したのだった。

デモは、1,000 名近くが参加した。夕暮れ迫る祇園石段下では、「なんや、早うせんかい!!!」と、デモ隊を挑発する年配の私服刑事が仁王立ちして、久方ぶりの新左翼デモを待ち受けていた。彼らも昔を彷彿としていたのだろうか。

度重なる京都府警の警告は 7 回にも及び、それなりに戦闘的なデモはできたのだったが、総括集会では、「あんなフランス・デモだけでは満足できへんわ」とか、「あそこでジグザグだけはやりたかった」という老年の方の意見が相次ぎ、来年はもっと「激しくやれ」との希望として、事務局は笑って「ご意見」を拝聴した。みんな元気だなあと実感する次第である。

やはり 10.21 というのは特別な思いが皆にある。

私たちの、これまでの数十年が「大空位時代」を経て、大きく飛躍するためには、こうした場の創出も含めて地道な活動が必要になるのは言うまでもないのだが、じっくりと反逆の思いを醸成していくのに京都は特異な環境にあるとだけ指摘しておきたい。今回の京都における共同行動において、いわゆる党派の諸君が、半ば禁欲的に、半ば大衆として、ひとりの原点に戻れて参加することが可能になったことは、予想もできぬ大きな収穫であった。

【いまだ党ならず、いまだ党なし】(1969.12 京大全共闘・秋のレポート) という認識と、【自分が一步踏み出せば、必ず向こうからゴツと一つ返ってくるものがある。その返ってくるものを身に浴びたときに受ける

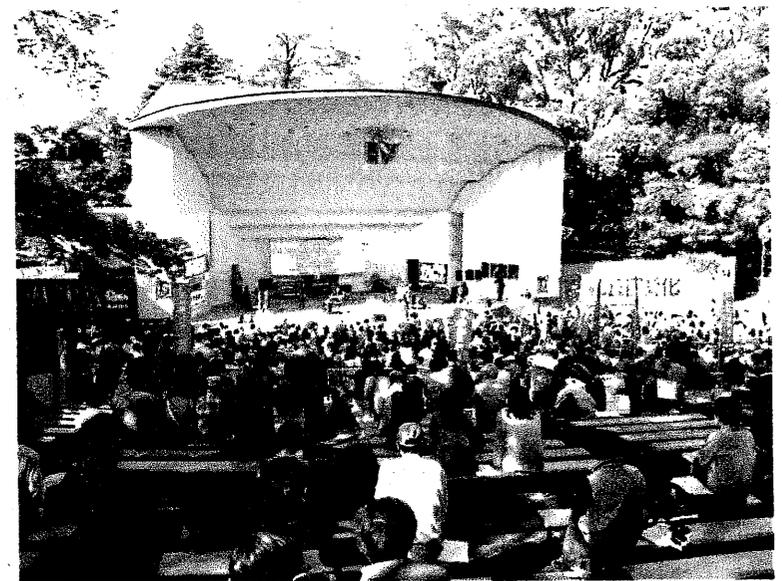
「僕は生きている」という実感のことを自由というのではないだろうか】(1969.7「高橋和巳 生涯にわたる阿修羅として」)という闘い抗う強い個人への回帰を模索できたという点で、今回の円山における共同行動は大きな成果を上げたと言えよう。

願わくは、私たちの再登場に際して、もっと広汎な老・中・青・幼のひとたちの結集をみるよう、創意と工夫を厭わず、前をしっかりと向いて、お互いを自己検証しながらの取り組みが日々行われたらもっともっと素晴らしい集会ができるのではなからうかと自問自答している……

とりあえず、当日の参加者の皆さんに、この場を借りて大きな感謝を捧げたい。

10.21 反戦共同行動 in 京都・事務局 WEB 担当 原啓介

<http://www.kyotohansen.org/>



投稿 6年ぶりのレバノン訪問にて

渡辺修孝

過去には様々な闘いがあった。70年代には、アラブ地域での国際根拠地を求め
る闘いや日本国内の運動を何とか打開しようとしたノンセクトグループの闘いが
あったろう。だが、しかし、今は私の世代から見てすら遠い昔の出来事のように
感じる。私が岡本公三氏を初めて知ったのは、2000年に彼がレバノンへ政治
亡命を果たしたときだった。現在の岡本氏は、自分を取り巻く政治的関係性の中
に在って“如何に生きるか”ということが日々の闘いとなっている。岡本氏の2度
目の解放当初に私は1年間だけ彼の生活を支えるヘルパーとして友人らと共に
共同生活することになった。その頃の様子は、様々な人たちから報告されてい
ると思うのでいまさら改めて述べるまでもない。1年間を彼と過ごした後、私は暫ら
く別の運動に関わることになった。その後、6年間を経た2007年9月に再び岡
本氏の住むレバノンを訪れたのは、他でもない自分の在り方に対して、ある意味
けじめをつけようと思っていたからだ。その、けじめというのは、6年という時間的
空白を埋め合わせようなどというものではなく、ましてや、その間に移り変わった
人間関係の詮索などでもなかった。この先、私はレバノン・パレスチナの友人た
ちや岡本公三氏と新たな関わりを作り、現在の自分を曝け出して大手を振って
彼らと付き合うために、過去の自分と決別する“けじめ”として今回の訪問は意味
があったと思う。

この、レバノン滞在中に岡本氏の家を訪問して、まずはじめに気が付いたこと
があった。彼が6年前と比べると、ずいぶんと自活したライフスタイルを身に付け
ているということだ。以前の私が居た頃は、何から何までお世話してあげてい
たので甘えた生活態度だったのかもしれない。それが、日本人サポートのいない現
地の人たちだけの共同生活に変わったのだ。ある程度の自制心を持った大人と
しての習慣が身についたと思う。1年ほど前に、他の日本人サポートが引き上げ
てからずっと現地の友人たちに見守られながらの生活だった。彼が日本語で思
いっきりストレスを発散したり、ジョークを飛ばす相手がいなくなってしまった。一

時期は凄く寂しがっていたらしいが、今はそんな様子も見せず環境に適應して、
たまに近所の子どもたちとも遊んだりしながら日々を暮らしているようだ。ただ、
私の見た限り欲を言えば毎日の食事である。現地の人の作るメニューなので当
然日本食など食べられるはずもなく、少し飽き飽きしているようにも見受けられた。
まあ、現地の友人たちも一生懸命やっているのは判る。私たちが岡本氏と生活し
ていたから、その大変さはよく判るのだ。何かと、けっこう気を使うこともある。特
に、彼の生活のペースに合わせるのは誰でも1週間くらいまでなら我慢できると
思う。ところが、それがいつまで続くかわからないほど長期の見通しだと一緒に
いる者も精神的に疲れてしまう。それは、日本でホームヘルパー・介護の仕事を
した人でも同じく経験した問題だろう。そのような時、サポートの側もまた“休養”
が必要なのだ。しかし、岡本氏のサポートには今のところ、残念ながら交代要員
がない。もう、毎日の生活の中、タイミングを見計らって「手を抜き、休む」しか
ないのだ。というわけで、今回の私のようにたまには様子を伺いに日本人が訪問
することも良いと思う。それは、岡本氏にとっても、現地サポートにとってもありが
たいことなのだ。

そこで、気をつけなければならないこともある。私のように長い間、「市民生活」
を続けてきた者から見れば、レバノンの治安状況から見た現地のセキュリティー
感覚が今ひとつ理解できない。まあ、同じ日本人でも、それこそ70年代頃から国
内地下活動経験のある「古参」の方々なら、どのようなものか大概予想が付くだ
ろう。つまり、何故セキュリティーかと言うと、最近のレバノン情勢は大統領選挙
前に立て続けに起こった閣僚の暗殺事件やパレスチナ難民キャンプを背景に
した過激派の武装蜂起などで極めて流動的である。岡本氏は、レバノンにおいて
政治亡命者だ。まんがいちトバッチリが飛んで来ないとも限らない。現地を訪問
するときは、治安状況も含めて身の周りに充分注意しなければならない。しかし、
現在、30代より若い世代にそれを理解しろと言うのは無理な話であろう。それ
を性急に押し付けようとするれば、若い者は変にエクストリームな解釈をしてしま
うので逆に危険だ。だから最低限、現地サポートたちの忠告や助言を原則的に守
っていれば問題はない。

さて、今回久しぶりにリッダ闘争戦士たちのお墓参りもしてきた。実に6年ぶりである。シャティーラ難民キャンプ近くの集団墓地には、パレスティナ難民たちの墓標がびっしりと並んでいる。もちろんそこには、一般の住民のみならず解放闘争の殉教者たちも眠る場所なのだ。あの、PFLPの詩人ガッサン・カナファーニや彼の姪もそこに眠っている。私が以前来たときは、彼らの墓標は汚れて古びたものだった。が、今回来て見てそれが新しく立派なものになっていたのに驚いた。きっと誰か縁のある人たちが建て直したのだろう。ちょうど、その斜め前にある小さな墓標がリッダ闘争戦士の墓だ。小さなコンクリートの土台に石のプレートがはめ込んであるだけの質素なものである。私はそこに線香を供えてきた。しかし、その墓標にはめ込んである写真のガラスが何故か何者かに意図的に割られているのではないか。周囲の墓標には何もされていない。この墓標だけそのような状態なのだ。しかも、コンクリートの土台も斜めに傾いていた。何ということだろう。集団墓地の中、この墓標だけを狙って、もの言わぬ死者の顔にこんな悪質なイタズラをするとはよほど怨みがある者の仕業か。仔細に心当たりは無いにしても、いずれは修復が必要であろう。来年の5月30日までには何とかしたいものである。

《短歌で遊ぼう》～さわ女と「寄っていで短歌」～

『題詠』 10・21 京都反戦共同行動
 立て看に色とりどりの旗の波老若男女の平和の行進
 さわさわと乾いた風の秋日和 10・21 再び集いぬ
 四十年前の理想のひこばえか心の碧わかち集いぬ
 要介護の父母を待たせて円山へ 10・21 友の待つデモ
 晴天の 10・21 空笑う友へとひびけインターナショナル



さわ女

茜さす雲の行方を見据えれば彼方の友の戦う姿
 彼岸からこの岸に来て遊ばむと誘いし我のあわれ悔しさ
 澄んだ眼とよく透る声悲しくて思いの果てに涙とまらず
 苦しさはわが生涯のことでなく真理の外に放たれた彼
 かすかなる生きている元気だという風の便りに胸は詰まりて
 若き日に誓う言葉の大事さに青春と言う意味を知る吾れ

原啓介

チェ・ゲバラの大ポスターが集会の空気引き締め高揚させる
 (チェ・ゲバラの大ポスターに集い来し老若男女の反戦の宴 さわ女)
 反戦の人寄り合うが似つかわし秋の円山音楽堂よ
 (反戦の人寄り添って燃える秋老若男女の丸山野音 さわ女)
 反戦を訴え進む人の波秋の京都にデモよく似合う
 円山の空一杯に朗々とパンタ歌いぬ「ライラのバラード」
 学生の頃親しめる円山に老・中・青が集う 07

森本忠紀

友遠方より来たる顔を見るたびに嬉し 10・21 の円山
 黒のセーター赤いジャンパーにジーンズ格好をつけた我を笑う 10・21
 チェ・ゲバラのプラカードが行く夕闇の京都 10・21
 よわい重ねてもかわらぬ NO 天気我に進歩なし
 明朝(あした)目覚められるか暗闇に目を閉じる枕元の缶ビール

田川晴信

銀難(ぎんなん)を拾い集めるこの頃に胸さわぐ円山の朝
 円山の空高く赤とんぼ懐かしき人とまた手を繋ぐ
 夕暮れて街歩く老人(ひと)斜着(シャツ)には赤き世界革命

等閑庵愚蓮

投稿コーナー

投稿の方々の、豊かな心の歌の数々、心が焦がれるような気持ちで読みました。



みな、詩心、歌心の方々のものですから、当然なのですが、素直な心を映すような歌です。大人なのですから、長い生活史の中で、金銭や生活のこと、あれこれあったでしょう。あっても濡らない水のごとく心にある真心が吐き出されるのが集まった歌の数々と嬉しく読みました。(さわ女)

○秋空のごとくに澄みた君が詩遠くかの地にも届けと願う

(生江男…(62歳)元、小学校の校長先生)

筆は達筆にも加味されて、しみじみと良いのびやかな歌ですね。…さわ女

○築70年の苦屋に糟糠の妻と二人きりで暮らしています。五畝(150坪)ばかりの畑を借りて「晴耕雨読」。度重なる大病を経て「生かされている」ことへの感謝の日々です。「さわさわ」の会費だけでは愛想がないので、畑のものと庭の柿など送ります

友の顔思い出しつつ芋を掘る (ごめんねじろう…(64歳))

この句には、喜怒哀楽がこもっていて、いい句です。私がか心配事がある時目にする、苦い思い出を呑みこみながら、芋を掘っているように晴曇りが描かれるし、又、朝の晴れた気持ちの良い時に読むと、友達の、思い出し笑いをしたくなる光景に、くすりと笑いつつ、芋を掘っているような、そんな姿も浮かびます。…さわ女

○学生運動から労働運動へ転進。争議屋(人権争議屋)を自認する。

喝采の宴離る寒椿	暮れなすむそれぞれの春山芦屋
たれひとり応答もなくまた一葉	ながたびの艶にじませてもみじ落つ
忘形の交わりゆかし合飲の花	霞立ち生駒は夢に消えんとす
浪々の車塵呑み込む花の雲	ふくよかに汁食む朋の初日影

(おさしろ まんり…(64歳))

句をずっとやってこられた方ですね。まず囁かれておられて、また、うまいです！句集を出されたいいうたが多いです。八句全部載せてくださいね。いい句ばかりです。でも、あまりブロ騒が並ぶと、私や、編集部は尻込みですから、減らしましょうか。八句全部良いのですが、この四句が特にしみじみと、心にしみます。人生を透視しきれないさびさが感じられ、私の心境を重ねてしまいます。命に触れるものが多いものを、選んだ性かもしれませぬ。…

○謹んで申し上げます。麦の会の事務局長様二は、大変に、お世話になっ

ております。冊子「さわさわ」も送ってくださり、幸甚に思っています。俳句五句、川柳三句、短歌四首、を投稿いたします。

〔俳句〕

雷のひとつうち天をずらしけり	ゆるやかな時を遊ばすシャボン玉
友の描く水彩画にも緑さす	春三日月淡々しきは獄舎の灯
行く秋やまどろみて肩かす列車	

川柳

獄卒は雀の泪で綱を引き	初夢や竹馬で塀をひとまたぎ
さんぶらこああ極楽の湯気を食む	

〔短歌〕

ゆびきりとさし手に小指硝子越しに吾娘と交わせず己れ小指なし
面会に半年ぶりのシスターの顔笑みこぼれるやただ泪
故郷はもはや万里となりうれどせめて届けよああ風便り
七度も生まれ変われど親の恩返し尽くせぬ親は尊い

(岐阜刑務所 M・M)

○私は現在、麦の会の方で連載小説を書かせていただいておりますが、今回、「さわさわ」で、俳句の募集がありましたので、拙い作品ではありますが、参加させていただきますので、よろしく願います。

雪撥ねて春の歓声竹の風	翺雲不幸の数を載せて尚
枯れて尚命の挽歌血の滾り	老兵は露と消えても剣折れず
月光に影を落として雁の群れ	雪あげてやがて天突く竹もある

(岐阜刑務所 影法師)

〈さわ女の「身になれば」短歌」コーナー〉

○忠紀の手紙…

夕食の準備でぼくが台所に立つと、母親が車椅子からじっとこちらを見
ております。

「それはわかめかい？わかめやったら、ジャガイモと煮たらおいしいな。」

と母。

「あのな、煮物は今日はキャベツがもうできてる。このわかめはな、酢のものにするねん。」ぼくは、よけいなことを言わん

といてという言葉呑みこみます。母が「ああ、そう。」と言うのに、ぼくはおさまらなくて「じゃがいもは嫌いや言うたくせに」「一生食べへん言うたわけやないがな。」「一生食べへんいう顔して言うてたでえ」と、こんな調子です。とても歌はできません。

さわ女作短歌

母と吾は似たもの同士お互いの足らざるを見つけ一言多し
車椅子と介護の吾の間には壁なきゆえに皮肉の棘一つ

忠紀さんの身になったら次々うまれますよ。

○忠紀の手紙…

父親が食卓の隣の席で新聞を読んでいます。今はもう朝です。父親に食事を提供する時刻ですが、手紙を書きあげてしまいたいので、少し待つてもらっています。父親は食事の時だけ車椅子に座りますが、あとはずっと、ベッド生活です。ベッドから車椅子に移す時は、父親は重いので、ヨッコラショと相撲のように抱きあげます。それを見てなすなは、目を丸めながら、「パパ力持ちやなあ」と言います。

さわ女作短歌

食卓の朝の陽ざしを背に浴びて要介護の父は新聞を読む

そんな感じてしょうか。忠紀さんの家族や手紙には独居の私には短歌のヒントがいっぱいあります。

抱き上げる父の重さに耐えおれば吾子はパパ力持ちと言ひし

とか。

もう、明日の公判準備で、手紙にはまってしまっはれいけない！と思い直しています。歌は、情景を描くと、今日の私の役割を忘れてしまひそうです。

塀を越えて、歌声を届けよう

贈ります、この一曲

②たんぼぼ保育所の歌

ドアをあけて、一步中に入ると、いるわ、いるわ、2歳、3歳、4歳の子供たちが、十数人、いっせいに、こちらを向いて、笑いかけ、手を振り、跳んだり、はねたり、何人かの子供たちは、寄って来て、手を取って引っ張ってくれる子もあります。

賑やかです。元気一杯です。この、マンションの一室は、特別に、素晴らしい気が一杯満たされています。そんな中に、にこやかさと、真剣さ、両方の表情を同時に備えた保育士さんがおられます。それが、たんぼぼ保育所です。

私は、このたんぼぼ保育所を訪れるのが大好きです。今年3月まで、娘の、すぎな、なすなが在籍しておりました。3月にすぎなが卒園し、現在はなすなが、お世話になっています。朝の登園時、なすなはよく遅れるので、マンションに着くと、保育ルームから、ピアノの音とともに、園児たちの元気な声で、この、「たんぼぼ保育所の歌」が聞こえてくるのがよくあります。

11月3日、恒例の運動会がありました。「親子フェスティバル」となすけられ、園児と保護者、兄弟たち、それに、地域の老人施設、「ゆかりの里」からお年寄りたちが、参加してくださり、大盛況となりました。今日の日を指折り数えて楽しみにしてくださっていたという、お年寄りたちは、頬がゆるみっぱなしでした。

主任保育士は、女兒二人のお父さん。自らの子育ての経験から保育に目覚めたという。それから、一念発起、保育士免許をとられました。子供たちを守ることで保育を守ろうと一身を保育に打ち込む熱血漢。保育所の健全な発展から、明るい地域作りをめざしておられます。(森本 忠紀)

たんぼぼ保育園園歌

作詞 寺所 準一
作曲 梅山 晃

Andante ♩ = 80

The musical score is written for piano and voice. It consists of four systems of staves. The first system shows the piano introduction with dynamics *mf* and *rit.*. The second system begins the vocal line with lyrics: 「あふれたい おもちゃを うみに ながせば」. The third system continues with lyrics: 「こども どの国も 遊ばせよう」. The fourth system concludes with lyrics: 「たんぼぼの わたしの ように」. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings like *mf*, *rit.*, and *cresc.*.

読者からのお便り

真摯な活動に敬意を表したいと思います。未永く、続きますことを希ってます。
(宮崎市 田崎哲史)

「さわさわ」創刊号ありがとうございます。「過去」のことは実は「現在」のこと。忘れてはなりませんね。重信さんや、連赤や、星野文昭さんらのことを。(宝塚市 木下達雄)

重信さんのさわやかな文章読みました。良かった！(藤井寺市 中川正広)

創刊号を友人からもらいました。読みやすく、親しみが持てました。年間購読を希望します。(大阪市 松尾和子)

お元気でしょうか？「重信房子さんを支える会(関西)」会報が届きました。ありがとうございます。7月に京都のカフェテラツアで、PANNTAさんのライブ終演後に、森本様よりビールをご馳走になりました愛知県の長屋です。ずっと未納のままの会費が気になっていましたが(入金方法をどうしようか？入金確認がしやすいので現金封筒を購入してみたりとか…)、会報が先に届いてしまいました…。申し訳ありません。明日、郵便局から間違いなく会費を入金させていただく予定です。今月の21日は、京都の反戦集会(PANTAさんのライブですが…)へ参加の予定です。もちろん森本さんも来られますよね？楽しみにしています。(半田市 長屋亮介)

ご苦勞様です。京大西部での催し、楽しく読ませていただきました。70年代の課題は単に追憶ではなく、この国の越えられるべき課題だと認識しております。再会を期して！(松山市 J・T)

先日、職場では、東京のと真ん中に住む「族」とか「室」とか言われる人が乗ると言われている、車両の改修が行われていた。「何かあったら？」いけないということで、一輛ずつ、管理者を中心に、24時間、椅子に座って監視していた。12時間の交代勤務で、昼間はまだ労働者が近寄って冷やかしたり、話しかけたりと、ちょっかいをかけていくので、まだましと言っていたが、夜勤となると、雨の日などは、寒くて恐ろしかったといっていた。「ひとつまみ」の人のために、こんなに「いたれりつくせり」の車輛。すべての車輛もこれくらい、「いたれりつくせり」の検修をすれば、故障も、ましてや「尼崎の事故」のような大事故も起こるはずがない。私が、座っている管理者に、「黒ペンでもかけたるか」と言うと、彼は何と「首どころか死刑になるぞ」と。何と「天皇制」が骨の髄までしみこんでいることの恐ろしさよ。特権階級をなくすためにも、コンクリのベッドで寝てる人をなくすためにも頑張りたい。(吹田市 S.K)



重信房子さんへの重刑攻撃を糾弾する。歳暮

1.アラブ赤軍は国際義勇軍である。

第二次大戦前スペイン人民によって選出されたスペイン人民戦線政府に対して、軍部右翼フランコがヒットラー、ムッソリーニに支持されて反乱を起こし共和制スペインが危機に立った時、英国を始め、世界の青年が馳せ参じ国際義勇軍、第7旅団を結成して共和制スペイン擁護のために武器をとって戦った。英国ではオックスブリッジから3000人、ロンドンEastendの労働者街から7000人が参加した。

今、自分達の生地パレスチナから武力で追い立てられたパレスチナ人は、自らの生地にもどるべく武器をとってイスラエルと戦っている。

再三の国連決議を無視してイスラエルは武力占領を拡大し今日に至っている。3次に及ぶ中東戦争でアラブ諸国を破った強力なイスラエル軍と戦うパレスチナ人民の戦いに連帯してアラブ諸国を中心にこの戦いに多くの人々が参加している。戦闘機と戦車で武装したイスラエル軍と手榴弾とマシンガンのパレスチナゲリラの戦いは素手で戦うようなものである。重信房子を中心とするアラブ赤軍はパレスチナ解放機構を構成するPFLPの傘下においてリッジ空港占拠闘争等数々の闘争を実行した。

重信房子は70年闘争の象徴的存在であり、国際主義と組織された暴力を標榜したブントの主張を実践した誇るべき人物である。その彼女が今捕らわれ、終身刑を求刑されている。アラブ赤軍は紛れもなく、イスラエルに暴力で奪われた生地を取り戻すパレスチナ人民の正義の戦いに連帯する国際義勇軍である。

スペイン戦争で人民戦線政府を支援するため、国際義勇軍に世界の青年が馳せ参じフランコ右翼軍と戦った。英国をはじめ第7旅団やボウムの戦列に参加した青年達は戦い敗れて帰国する。しかし義勇軍参加を理由に彼等を捕らえる母国政府は無かった。

パレスチナ解放闘争でも、世界の人民が参加している。

ゲバラはキューバ人ではない。キューバ革命参加を理由にアルゼンチン政府はゲバラに逮捕状を発行したのだろうか。否である。

歴史上革命・解放闘争に他国から義勇軍に参加した例は数多い、中国革命に参加し、長征途上で病に倒れた医師ベチューン等。中国を侵略した日本軍を脱走し、中国紅軍に参加した日本軍兵士もいる。

彼等は戦う人民に愛され尊敬されている。重信房子の公判に、アメリカのイラク侵略寸前の緊迫するアラブから重信を救援するため、命掛けで、駆けつけ証言台に立ったハイジャッククイーン、ライラハリドは現役の国会議員である。リッジ空港闘争はパレスチナ人民に感銘を与え、生き残った岡本は今も英雄として遇されている。

ライラハリドは重信公判の法廷で述べている。

彼女の行動は褒章されこそすれ、罰せられるなどもつてのほかだ。

彼女を罰することは解放闘争を戦う全ての戦士を罰することだ。と

同じことは今アラブ赤軍に参加し、捕らわれて重刑攻撃を受けている丸岡、西川等全ての

元赤軍兵士にいえることである。

重信房子支援集会に寄せられたライラハリドのメッセージを添付する。

友人達、仲間達、

パレスチナの民衆、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）、そして、私自身の名において、獄中の重信さんへの支援、更には彼女に課せられようとしている重刑に反対して皆さんとの連帯を更に強化したいと思います。重信さんは、解放闘争の活動家のシンボルです。表彰されるべきであって、牢獄に入れられるべきではありません。

彼女が、解放と独立に向かって闘っていたパレスチナ民衆を支援し、徹しく活動してきた女性であることを、私は知っています。その彼女は、今、彼女が犯した罪の為ではなく政治的な立場のために、獄に繋がれています。私達は、この政治的な拘留に反対します。私達パレスチナ人は、重信さんが今もなを牢獄に繋がれていることを心配しています。これは活動家に対する不正義と残虐な行為だからです。パレスチナ人もまた、同じように、イスラエルの軍事法廷によって同じ目に合わされています。

私自信は、彼女を支援しようとして、重信さんの法定にも証人として出廷しました。不幸にも裁判官は事実を聞き取るよりも、現在の政府の意向に彼等の認識を売り渡すべく主張していました。

このことは、裁判や正義の無い判決が私達には予め課せられていると言う、私達にとってはとても重大なことです。これもグローバリゼーションの一貫です。帝国主義勢力は、私達民衆全体、特に、パレスチナの占領下の民衆、イラクの民衆、そして世界中のパレスチナやイラクの支持者に敵対しています。

私は皆さんと確認したいと思います。

彼等の残虐な攻撃にもかかわらず、私達は自分達の人間的な義務として、イスラエルと米国のパレスチナ占領に対して、イラクや日本における抑圧と言う不正義に対して立ち向かいます。私達は、解放と正義と平和と民主主義経の闘いを拡大して行かなければなりません。そうです、私達は帝国主義者のグローバリゼーションに対決する闘いをグローバリズして行きましょう。

友人達、仲間たち

わがPFLPの名において、私達は、重信さんへの前面的な支持を表明し、重信さんの政治的拘留と重信さんが晒さらされている重刑攻撃に反対する集会への支持を表明します。このテーマの下に、私はあらゆる平和を求める勢力と解放闘争の活動家に、重信さん支援を呼びかけます。そして予測される重刑攻撃に抗議することを呼びかけます。

私自身は、裁判官達に、充分に公平な立場に立つように心を入れ替えることを呼びかけます。何故なら、重信さんは彼女個人ではないからです。彼女を裁くことは、抑圧された人々への連帯行為を裁くと言うことだからです。更には、正義を、解放闘争の戦士達を裁くこ

とだからです。

友人達、仲間達

この機会に、この集会を通して、重信さんへの私のメッセージを送らせてください。

重信房子さん、あなたは偉大な女性です。私達はあなたが解放されるのを待ち望んでいます。あなたは、世界中の、解放のために戦っている人々のシンボルです。特にあなたが支援してきたパレスチナ人にとってはことさらです。私達は9800人のパレスチナ人がイスラエルの刑務所から釈放されるのを望んでいるように、あなたが解放されることを強く望んでいます。

重信さん、私達はあなたを誇りに思っています。

私達は、私達の闘いに誇りを持っています。

如何なる苦難と犠牲もおしらず、

私達の声をあらゆる人々に届けよう

重信さんの解放を！

ライラ・ハリッド

パレスチナ民族評議会議員

PFLP政治局員

2006年2月

してきた川口弁護士も時効の停止は感覚としてはおかしいと言っている。

60年から70年にかけてベトナム反戦運動を中心に日本のみならず欧米でも青年の運動が燃え広がった。彼等の多くは今社会の中心で活動している。

この時代を共に戦った法曹界の人々に呼びかけたい。海外在住の時効停止の不当性を刑法界の世論として欲しい。

2007年12月 柳田

2.時効について

重信裁判で裁かれている事件は全て70年代の事件である。30年以上も前の話である。

「よど号」ハイジャックもそうであるが、それらは全て時効である。

殺人でも20年で時効である。30年前の事件は最早歴史の対象である。

海外にいたということで時効が停止するのが法的根拠となっているが、時代錯誤もはなはだしい。交通通信の発達によって地球は狭くなっている。10数時間でアメリカにもヨーロッパにもいけるのである。

国内と海外の差異はなくなっている。海外に出しまえば捜査の手が全く及ばない時代の産物が「時効」の停止である。

「よど号」の田中義三はカンボジアでCIAの手先に無実の罪で捕らえられ、日本に送還され、獄死させられた。赤軍派のメンバーの多くが海外で捕らえられている。

帝国主義の国際連携によって、国内、国外の区別は無くなっているのである。

こんな時代に海外在住を理由に「時効」が停止するのはおかしい。「よど号」の妻達を弁護

編集後記…「さわさわ」創刊号を出せてとてもうれしかった。喜んで、あちらにもこちらにも、送りました。それで、気が付いたのは、友人、知人との間の、ぼくの、日ごろのコミュニケーションがいかにも貧しくなっているかということです。「ご無沙汰しています。」という、お詫びの挨拶を何度書いたことでしょうか。住所録を繰れば、いずれも懐かしく、また、大切な友達が一杯います。そんな人たちを忘れて、自分はどこへ行こうかと思ったことです。「さわさわ」の創刊は、ぼくが、「ここからもう一度生き直す」、その出発点に立たせてくれたと言ってもオーバではないくらいのできごとでした。／その間に、関西では、10・21の取り組みがありました。「円山音楽堂を一杯にしよう」というのが、話の始まりでした。最初、聞いた時は、「えーっ？なんてことを？」と思いましたが、その無謀さ、いい加減さが良かったのだと思います。何ら企みも、強制力もなしに、1200人も人が集まったのですから。半年間の実行委員会は、準備のための単なるミーティングではなく、それ自身いつも小さな集会の様に、意義深いものでした。出る度に、ぼくの心が開かれた、そんな思いを抱いて帰ったものでした。そして、この日、10・21の集会に集まった人は、誰もが、自分のために準備された集会だと、きっとそう感じたことでしょうか。どうしてこんなことが可能だったのでしょうか。近來の快挙と言ってよいのではないのでしょうか。／人は誰も何らかの割合で詩人だと思えますが、そんな詩人を発現する場が減多にないのが、ぼくは残念でなりません。「さわさわ」2号から、「短歌で遊ぼう」が始まりました。この場で、思う存分、内なる、‘詩人’を解放していただきたいと思います。重信房子さんが、‘さわ女’という、歌人名で待っています。歌を仲立ちに、‘さわ女’‘さんと、スリリングで、味わい深いコミュニケーションを、ぜひ楽しんでいただきたいと思います。投句、投稿お待ちしております。／この、「さわさわ」2号を準備している現在、「重信公判」の控訴審判決が迫っています。12月20日（木）。そして、前日には、無罪を訴える集会在計画されています。できたての、「さわさわ」2号を持って、関西から駆けつけたいと思っています／次号第3号は3月刊行の予定です。重信さんへのお便り、投稿、大歓迎です。2月中に送ってください。

価格は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。（郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会）

連絡先—〒635-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002 mail:toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp